発表要旨記入要領

【発表要旨作成様式】

１．要旨作成様式で作成する。（別添ファイル発表要旨様式）

２．ポイント、書体の指示に注意

【演題名・発表者・所属】

１．発表者氏名の前に〇印を付し、共同研究者全員の氏名の所属を下記例で番号を付ける。

共同研究者の所属が複数の場合は、1)、2)、3)‥‥の順につける。

（Word において右肩に番号を付す方法が不明な場合は、〔F1〕キーを押して Word ヘルプ〔上付き〕で検索）

例；〇山田太郎[1)]田中一郎[2)]鈴木花子[1)2)]高橋祐司[3)]石川五郎[4)]

２．発表者所属（勤務先名）は、発表者、共同研究者の右肩に付した番号を下記例で記入し所属を記入。なお、所属（勤務先名）の略号については例にならって記入。枠内に収まらないときは、省略する。

例；1)東京都青山家保、2)青山動物病院・東京都、3)東大・4)動衛研〇〇領域

３．演題名は、枠内に収める。

【本　文】

１．本文の記述方法は、次の見出し区分を参考とする。

(1)記述の見出しは、［はじめに］、［材料および方法］、［成績および考察］等の表示で区分する。

(2)細分化して項目ごとに記述する場合は、両カッコを用いて(1)(2)(3)等とし、その後の区分は、ア．イ．ウ．、次は①②③とする。

２．図・表・写真等は添付しない。

《注》全角 1,000 字を超える場合や様式に合致していない場合は、再提出。

【例示：発表要旨（1,000 字）作成様式】

○○○○○○○○○○　　　　　　演題名＜14 ポイント、ゴシック体＞

○日獣太郎[1)]、日獣花子[1) 2)]　　　　発表者＜12 ポイント、明朝体、太字＞

[1]○○動物病院・東京都、[2]△△大学・××教室　　所属＜10.5 ポイント、明朝体＞

　○○○○○○○○○○…○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○……本文＜９ポイント、明朝体＞

【例示：発表要旨（1,000 字）記入例】

口蹄疫との類症鑑別を要したウイルス性疾病診断事例

○日獣太郎[1)]、日獣花子[1) 2)]

[1]○○県××家保、[2]△△大学・獣医外科

【はじめに】口蹄疫(FMD)の 2010 年国内発生以降、本県でも FMD を疑う通報が急増した。いずれも判断が容易ではなかったが、動物衛生研究所（動衛研）へ検体または画像送付や、経過観察を行って判断するなどの手段で、早期に対応してきた。今回、その FMD 様症状を呈した事例のうち、ウイルス性疾病診断に至った３例について報告する。

【事例１】2010 年５月、乳用牛肥育農場（２０８頭）、２カ月齢ホルスタイン種雄１頭

　体温３９．０℃、起立不能、鼻鏡、上唇、舌に水疱状の病変を確認。動衛研へ検体を送付したが、FMD は陰性。その後、牛丘疹性口炎ウイルス特異遺伝子が検出されたことから、「牛丘疹性口炎を疑う」と診断。

【事例２】2011 年４月、肉用牛肥育農場（428 頭）　見　毛和種１頭。

　体温４０．６℃、鼻腔内に潰瘍上病変を確認。動衛　付し、FMD は否定。経過観察後、水様状の下痢が確認され、病性鑑定で鼻腔スワブ、血液および血清から　下痢ウイルス（BVDV）特異遺伝子が検出され、病性鑑定解剖を実施。主要臓器、腸内容、血液から BVD　株が分離され、「BVDV-MD」と診断。

【事例３】2011 年 11 月、肉用牛繁殖農場（28 頭）　本　齢黒毛和種１頭

　体温 39.8℃、泡沫性の流涎を確認。経過観察後、　嚥下困難となり咽喉頭麻痺がうかがわれ、病性鑑定で牛伝染性鼻気管炎（IBR）ウイルス分離および抗体価の有意上昇が確認され、「IBR」と診断。

【まとめ】発生後、各事例の疑症頭数はすべて１頭で、病変部所見と症状のみでの即断は困難であったが、丁寧に経過観察を行うことで、事例１での水疱状病変は結果的に丘疹、事例２では下痢、事例３では咽喉頭麻痺を疑う所見など FMD と異なる症状が確認され、真症か否かの判断はある程度可能になると考えられた。やはり時間をかけ複数頭への伝染の有無や、症状の経時的観察が最も重要であり、その場合移動自粛によるまん延防止措置も重要となる。しかしながら措置が長引くと、出荷自粛により農家の経済活動や獣医師の診療活動に支障を来すケースもあり、それを優先して経過観察を怠った結果、病原体拡散という最悪の事態を想定すると判断は容易でないという課題も浮き彫りとなった。したがって、今後真症に至らなかった事例についても報告を重ね、我々獣医師の FMD 対応への一助としたい。

◎発表者所属（勤務先名）は下記参考に簡略記述。

・北海道大学　→北　大	・酪農学園大学→酪　農　大
・帯広畜産大学→　帯畜大	・北　里　大　学→北　里　大
・岩　手　大　学→　岩　大	・岐　阜　大　学→岐　阜　大
・日本獣医生命科学大学→　日獣大	・東　京　大　学→東　　大
・日　本　大　学　→日　大	・東京農工大学→農　工　大
・麻　布　大　学　　麻布大	・鳥　取　大　学→鳥　取　大
・山　口　大　学　　山口大	・宮　崎　大　学→宮　崎　大
・鹿児島大学　　鹿　大	・大阪公立大学→大阪公大
・県　庁　○　○　課→	○○県○○課
・県　保　健　所→	○○県○○保
・県食肉衛生検査所→	○○県○○食肉衛検
・農水省動物検疫所支所→	動検○○支所
・（国研）農研動物衛生研究部門拠点→	動衛研○○拠点
・県農業共済組合→	○○県農共組
・県家畜保健衛生所→	○○県○○家保
・県衛生研究所→	○○県衛研
・株　式　会　社－－→	○○○○（株）

用　語　集

1　用語等

・ 薬品・機器名は、原則として一般名または局方名とする（商品名、メーカー等は欄外に記載する）。

・ 動植物名などは、以下のとおりとする。

人、馬、牛、豚、めん羊、山羊、犬、猫、兎、鶏、あひる、がちょう、七面鳥、うずら、みつばち

上記以外は、原則としてカタカナとする。

例：サル、タヌキ、キツネ、カモシカ、シチメンチョウ、ブリ、ハエ、フスマ、カブ、トウモロコシ、ジャガイモ、ダイズ、アマニ粕など

・ “～以下に報告する”式の表現は用いないこととする（特に緒言において）。

・ 国名は原則としてカタカナ表記とする（例外：米国、英国は漢字表記）。

・ 略称は、一般に広く用いられているものを用い、それ以外はわかりやすい略称を用いる。略称を用いる場合は、最初に用いた単語に略称の表示を行い、以後は略称で統一する。

標題、見出しでは、原則として略称は用いない、ただし、慣用的に用いられているものについては、この限りではない。

・ 特に表中においては、同様を意味する略称「〃」は、用いない。かならず同じ字句を繰り返して記述する。

・ その他の字句については、統一を保つため、下記の参考事例を参照のこと。

例：1　専門的用語や記号等

「・」（ナカテン）は原則として用いない（犬・猫の→犬と猫の）

オス♂、メス♀または牡、牝→雄、雌　　２才→２歳

年令→年齢　　仔牛→子牛　　胎児→胎子（ただし、人の場合は胎児）

・タイトル「---について」の「について」は省く。

・すべて西暦で書く。（科学論文の通則）

・××管内　―　××地区（内）

第４胃→第四胃　　心、肝→心臓、肝臓（ただし肺→肺）

血液生化学的→血液化学的　　生理食塩水→生理食塩液

エックス線→Ｘ線　　Ｈ・Ｅ染色、Ｈ―Ｅ染色→ＨＥ染色

連鎖状球菌、連鎖球菌→レンサ球菌　ぶどう状球菌、ぶどう球菌→ブドウ球菌

他の注意すべき専門用語（下線部のように用いる）

まん延	奇形	
咀しゃく	歩様そうろう	てんかん
うっ血	び慢性	線維素
浸潤	浸出液	混濁
希釈	濾過・ろ過（ロ過は用いない）	
回虫症	掻痒症	じん麻疹
頚または頸部	貯留	沈殿
蛋白質	超音波検査法	

2　その他の用語

我国→わが国　　我々→われわれ（または演者ら）
佐藤等は～→佐藤らは～　　1ヶ所、1箇所→1ヵ所
～の一例→～の1例　　～の1つ→～の一つ
20日齢～30日齢→20～30日齢　　1980年から1990年→1980～1990年
ＡよりＢ→ＡからＢ（“～より”は比較する場合のみ用いる）
一方→いっぽう、（接続詞として用いるとき）→その後、また一方になった。
従って、→したがって、（接続詞として用いるとき）
更に、→さらに、　　例えば、→たとえば、
即ち、→すなわち、　　或は、→あるいは、
但し、→ただし、
又→また　　及び→および（接続詞として用いるとき）
並びに→ならびに　　若しくは→もしくは
～の通り→～のとおり　　～の様に→～のように
殆ど→ほとんど　　全く→まったく
総て、全て→すべて　　未だ、今だ→いまだ
僅かに→わずかに　　極めて→きわめて
至って→いたって　　とくに→特に
概ね→おおむね　　直ちに→ただちに
共に→ともに　　充分に→十分に
何れ→いずれ　　既に→すでに
主に→おもに　　その外→そのほか
そのた→その他　　～に伴って→～にともなって
～毎に→～ごとに　　～の如く→～のように

～する事→～すること　　～と言うこと→～ということ
～に過ぎない→～にすぎない　　～した方が良い→～したほうがよい
～が見られた→～がみられた　　～され易い→～されやすい
～では無い→～ではない　　～より先に→～よりさきに
～に拘わらず、関わらず→～にかかわらず　～の限り→～のかぎり
～と併せて→～にあわせて　　～する余り→～するあまり
行なった→行った　　起った→起こった
終る→終わる　　挙げる→あげる
基ずく→基づく　　行って来た→行ってきた
出来る→できる

3　イタリックで表記する用語

in　vivo ,in　vitro 等のラテン語系副詞および慣用句はイタリックで表記する。
学名の属名と種小名もイタリックで表記する。
（ただし、学名のカタカナ表記は認めない。）